

編集後記

昨年（2023年）に本誌編集委員に加えていただいた林邦彦です。コントローラー委員会時代の本誌を知る者として、微力ながらお手伝いできればと思います。

さて、本号は、昨年11月に群馬大学で開催されたシンポジウム「レギュラトリーサイエンス・オープンサイエンスからみたデータサイエンス：その基本原理と人材育成」での議論をもとにした講演録や短報が掲載されています。ここでは、「データサイエンス」、「レギュラトリーサイエンス」、「オープンサイエンス」、「シチズンサイエンス」、「オープンデータ」、「オープンアクセス」、「オープンイノベーション」などカタカナ名が数多く登場します。このシンポジウムの成果のひとつに、各語について専門分野などが異なると少しずつ話す内容や思い描く内容が異なることが明らかになったこともあげられます（「レギュラトリーサイエンス」については椿広計氏および弓仲康史氏、「オープンサイエンス」については齊尾武郎氏の論文を参照されたい）。

これらの語は、いずれも既に広く使われているようです。無理に訳語にすると、明治時代に起きた森林太郎と今井武夫との「スタチスチックは統計か」論争のような事態を招きかねません。このため「スタチスチック」の語を好んだ杉亨二が主張したように、実際はそこまで深くは考えてはいませんでしたが、このシンポジウムでは無理に訳語をあてずにカタカナ名としてそのまま使用しました。また特に語の定義などもしませんでした。「スタチスチックは統計か」論争は、単に適切な訳語を創ることに関する論争ではなく、Statisticsという学問領域の役割や定義について各々が思い描く内容の差異を明らかにし、それら差異を共有していく上で、必要かつ重要な過程であったのだらうと思います。この論争において、森林太郎は「スタチスチックとは、原因を探り法則を知り得るものではない」としました。一方で、今井武夫は「スタチスチックで人間社会の諸現象をいろいろな要因との関係を検討すれば、原因を探り法則を定めることが出来る」としました。

これらの議論は、現在、普及しつつあるデータ駆動科学やAI利用の健康データサイエンスなどで、データ収集やデータ分析に対する因果推論の観点からの批判にも通ずるものがあるかと思います。今後、上記のカタカナ名になっている各学問領域や科学的ムーブメントについて、各々が思い描く内容の差異を明らかにするとともに、それらの差異を共有しながら、わが国においても発展していけば良いなど考えています。

（林 邦彦）